

17号 特集 やどかりの里 30周年記念全国横断キャラバン

ともに創り合う「やどかりの里」への転換
なぜ私たちはキャラバンをスタートさせたか
メンバーと職員の協働をより確かなものに

増田 一世（やどかりの里 30周年記念全国縦断キャラバン実行委員）
（やどかり情報館）

新たな危機に直面した「やどかりの里」

1970年に活動を開始した「やどかりの里」は、世紀末に30歳を向かえ、大きな節目に遭遇することになった。そして、1冊の本が出版された。『職員主導の活動からともに創り合うやどかりの里への転換』である。

「やどかりの里」は、この30年間さまざまな危機に見舞われながら、そのたびにその危機をくぐりぬけてきた。

社会復帰施設に補助金が交付されるようになり、「やどかりの里」では1990年に援護寮と通所授産施設からなる複合施設を開設した。その後、地域の中に、作業所やグループホームを点在させ、生活支援センターを配置してきた。1997年には、「やどかり情報館」（精神障害者福祉工場）を開設した。

活動の広がりの中で、財政的には安定したものの、「やどかりの里」は新たな危機を迎えることになった。活動が急激に広がり、職員もメンバーも増え、活動の広がりには職員の力量形成が追いつかなかったのだ。そして、これまでの組織運営では立ち行かない、という局面を迎えるに至った。強力なリーダーシップのもとで結集していくという従来のあり方の限界が明らかになっていったのである。1人1人の職員が主体化し、それぞれの活動の独立性を高めつつ、横の連携を強めていくという進め方をとるために、さまざまな試みが模索され、実行され、ついに「やどかりの里」全体の運営が変わっていかうとする動きが見えてきた。